

調査地域は、大宮台地の東南部で、行政的には、浦和市と川口市の東部地域にあたる。この地域は、都心から半径15km～25kmの地帯にはいり、工業都市である川口市や住宅都市である浦和市にあるわけであるが、この地域の産業は農業が中心であるという特色をもつ。

大宮台地はこの地域では2つに分かれていて、その間に見沼低地があり、東側には中川低地がある。台地は開析が進んで、谷底など比較的变化に富んだ地形を表わしている。

この地域の農業においては、作物として植木の栽培に特色があり、専業農家率は40%内外と高い割合を示す(埼玉県平均14.8%)。植木の栽培は古い歴史をもち、江戸時代の明暦の大火をきっかけに始まったといわれるが、江戸の発展、その後の東京の発展とともに、この大都市への植木の供給地として最も大きな位置を占めてきた。その古くからの歴史が流通面や技術面において、優位な条件をつくり、また、植木という作物が、地価の値上がりや労働不足に悩まされている都市近郊において経済的に有利な作物であることも重なり、この地域では、農業を意欲的に存続させていく意志をもつ経営者が多い。しかし、その場合規模を広げるだけの余地は、この地域内で得られないため、今後、地域外への分圃や委託栽培などの増加の方向あるいは造園業といった集約化の方向に進んでいくと思われる。川口市もこの地域を生産緑地として残したいという意向をみせているがこの地域のかなりが市街化区域に指定されていることもあってむずかしい面がある。

## 小糸川流域の地理学的考察

柴田裕美

小糸川は房総半島を北流し東京湾に注ぐ2級河川で、流域は君津市と富津市内にある。考察の目的は1河川全体を把握することによって、河川が流域に与えた諸影響を知ること。及び本地域に東京を中心とする圏構造が存在するかどうかである。

自然環境 地質は第三紀層の砂岩、泥岩の互層から成り、北西に緩傾斜した単斜構造を成している。地盤が下刻しやすかったため、小糸川は3段の段丘を作って穿入蛇行している。段丘のうち上位にはローム層をのせているが、下の2段は沖積段丘である。段丘面と河床面との比高は10～数10mもあるため、上中流部では引水が不可能である。一方、湧水性の高い地層の多い単斜構造のため、被圧地下水は自噴する。土壌は一般に中細粒質で、谷底平野や下流部にグライ土がみられる。

下流の一部は粗粒質で、多くは畑地土壌となっている。

人文環境 歴史的に見るとこの地域は大豪族による支配をうけたことがないため、水系全体を考えた用水工事が行われなかった。農業は常に水不足との戦いであり、上総堀が開発されたのも水不足の影響が強い。小糸川には大正時代まで水運があったが、現在は道路がすべてである。溪口集落として栄えた市場町もあったが、現主は衰退してしまい流域内の中心都市は存在しない。人口は漸減傾向であったが、君津製鉄所の設立以降転入が増加し一躍成長都市と見られるようになった。農業は主穀農業を中心としている。東京湾に面し、京葉工業地帯の延長上にあるため、新日鉄君津製鉄所の立地以後農業の荒廃と農民層の分解が目立ってきた。

農業 兼業率が高く所得も低い。多くの農民は工業地帯に臨時雇用の形で勤務している。富津地区の一部に蔬采農業がある他は稲作中心で、近郊農業の発達は見られない。一部には湧水という自然条件を利用した園芸農業もあるが、工業労働力とした流出する傾向は強まっている。工業化による背後地農業の悪化は地価の高騰とも関係しながら進んでいる。

地域区分 本地域には工業地帯や東京・千葉を核とする圏構造が見られ、海岸部から工業地区、市街地及び同予定地区、郊外住宅及び同予定地区、農業地区、農山村地区の順に並んでいる。これは川沿いなど奥に進展している。

この地域区分は東京を核とする関東地方における圏構造とも類似しているが、近郊農業の発達が少ない点では異っている。今後、本地域は都市化の傾向を強めるであろうが、近郊農業が発展するか農業が荒廃し、副業となりきってしまうかは、畜産や畑作をどの程度まで伸長させられるかにかかっていると見えよう。